

外来語アクセントの対応について

E S 生

方言の中へ新語・外来語が入りこむとき、その語のアクセントは一体どのような形をとるのか。各方言のアクセント規則にしたがって変形するのか。あるいはその語の出発地における形のままに入っていくのか。

この問題を考えるための一つの材料に、真田信治氏が報告した昭和期の新語である「テレビ」という語のアクセント形の全国分布図がある（飛田良文編著『英米外来語の世界』南雲堂、一九八一・一〇）。真田氏は、「テレビ」についての各地のアクセント形を示し（図参照）、次のように述べている。

中央語としての東京語でのアクセントは●○○形であり、語頭の音節が高く発音されている。……図によれば、●○○形の地方は、関東、中部、中国、および九州の東部などである。これらは、いわゆる東京式アクセントの行なわれている地域であることが注目されよう。なお、近畿の周辺部には●○○形と○○●形と

にゆれている地点がある。……東京での●○○形に発音される語は、「便り」「兜」などの語であるが、例えば「便り」は、大阪や鹿児島では○○●形に発音されている。……「テレビ」のアクセントは、この語群のアクセントと各地で非常によく対応することは注目すべき事実である。

この「テレビ」の例に見られる新入語のアクセントが方言間で和語の語類と同様の対応を示す現象は、はたして偶然なのであろうか。小暮紀子氏は、この「テレビ」以外にも、次のようないくつかの対応例がある事実を報告している。私見によれば、これは極めて注目に価する発表であった（『東西外来語アクセントについての考察』日本方言研究会第三四回発表原稿集、一九八二・五）。

語例（三拍語の場合）

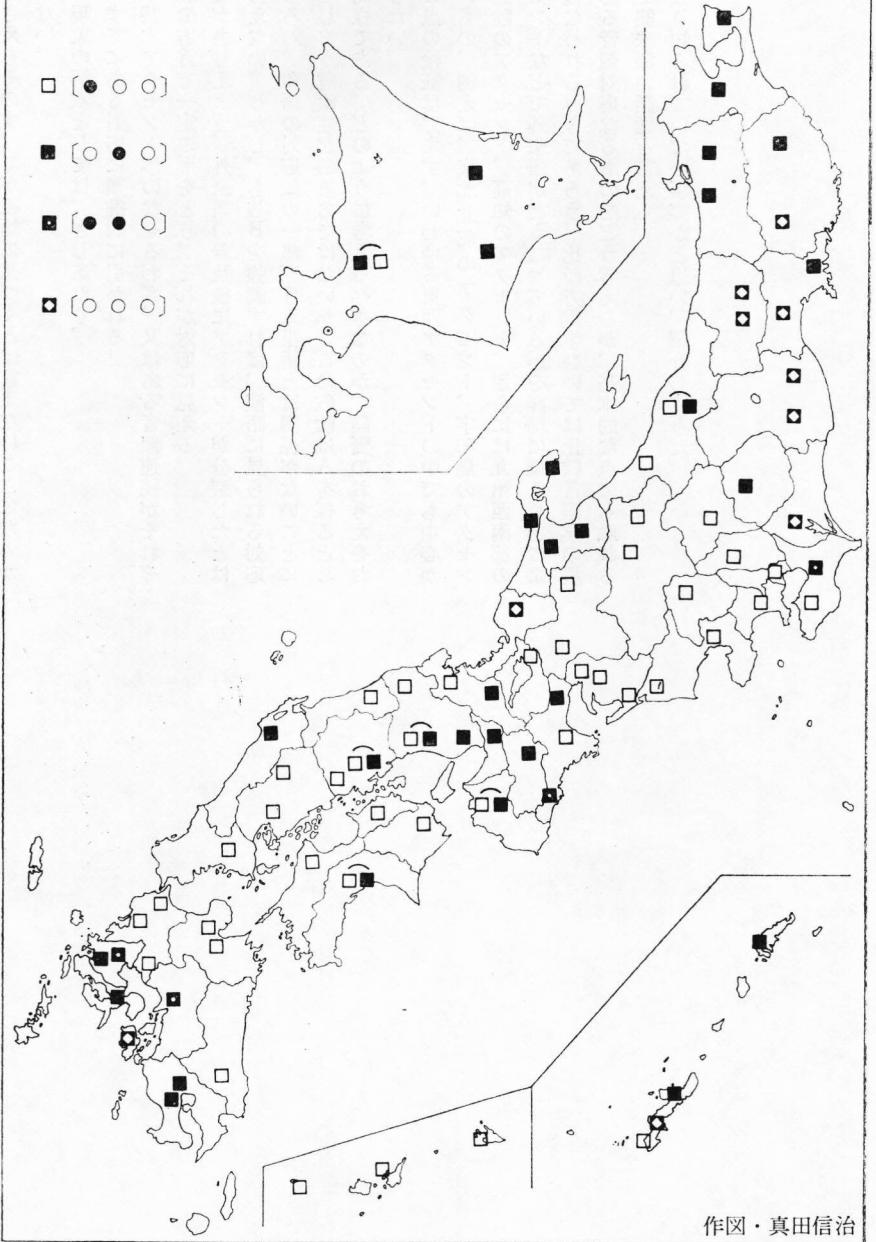
東（●○○）——西（○○●）

「アジア、インド、ゲリラ、ゴリラ、コレラ、バナナ、ニグロ、フラノ、ロシア、ポリス」など

ところで、小暮氏のデータは平山輝男編『全国アクセント辞典』（東京堂出版、一九六〇・六）によっているが、上掲の「テレビ」の京都でのアクセント形は、この辞典では東京と同じ●○○形とされている。真田氏のデータと照合すると、関西では●○○形から○○●形への変化が起りつつある（対応が整備されつつある！）らしい。ちなみに、「テレビ」より古い語「ラジオ」の京都でのアクセント形はこの辞典においてもすでに○○●形に表示されている。

もし、以上の事実が一般化できるなら、例えば、漢語に和語に匹敵する対応があっても、それは漢語普及後に東西の分裂が生じたという根拠にはなりにくいことになる。さらに言えば、和語に見られ

「テレビ」のアクセント形の分布



る対応さえも、そのすべてが祖語に基づくとは言えないことになるかもしれない。

この現象の解釈としては、さしあたり、

A、すでにある対応に類推的に引かれる。

B、基本アクセント形のなせるわざ、又はある音韻連続がそれぞれの方言で一定の形をとり、それが対応に見える。

の二案がありえよう。外来語の普及後にアクセントが分裂したとは無論言えない。しかし、もしBを強調すれば、漢語に見られる対応はもちろん、和語の対応（の一部）さえ祖語とは関係がないことになってしまう危険性があるのではないか。この危険はAを探るとしても同様である。どのように考えるべきなのか、諸賢のお考えをお伺いしたい。

この点の検証は、まず、いわゆる東西アクセントの中でも中心から遠いもの、例えば、東北北部のアクセント、宇和島のアクセント、北陸のアクセント、高知のアクセント、さらには九州西南部のアクセントなどで外来語がどうなっているかを詳細に探ることによって行なわれるべきであろう。比較方言学ひいては比較言語学の根底にある音韻対応なるものをどう考えるか、基本的な点にも触れる極めて興味深い話題と言える。

あまり知られていない事実かと思ひ、紹介してみた。